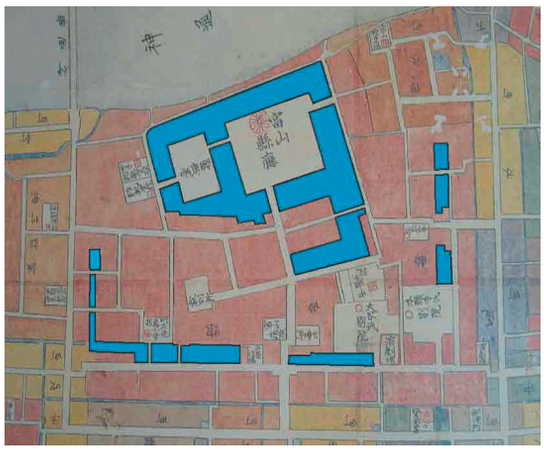
①三之丸の解体と街づくり

まずは三之丸部分です（Ｐ２の地図参照）。払い下げが進むにつれて、必要のなくなった外堀が徐々に埋め立てられていき、その跡には新たに建物が建てられていきました。この内、学校や寺院を建てる際には、砂持奉仕が行われました。有志が神通川等から石や砂を運び、堀を埋め立てる作業を奉仕で行ったのです。特に、本願寺東西両別院の砂持奉仕は大規模なものでした。富山は真宗門徒の多い土地柄ですから、多くの門徒衆が熱心に奉仕を行いました。



同じく明治18年の市街図（部分）です。青色の部分が堀が残っている部分。埋め立てが大分進んでいることが分ります。

それでは、啓迪小学校（後の八人町小学校）新築の際の砂持の様子を、当時の新聞に見てみましょう。

其模様ハ熟れも大ハ車に砂を積み載せ、車の左右前後にハ砂持等の文字を大書したる数旒の紅白旗を翻がへし、車轅の両端に長き縄を結付け、七ハ歳の小児輩にハこゝが一番と晴の緋縮緬や天鵞絨の襦袢股引を着せ、華笠を冠らせなど、最と（も）美々敷扮装にて縄に取付き前駆仁和賀連の囃しを拍子にヤンヤヽヽヽと市街を打廻り行きつ戻りつ中々の賑ひなり「中越新聞」（明治 20.6.13）　ルビは原文を元に付しています。

砂を積んだ大八車の左右前後には「砂持」などと書かれた紅白の旗が翻っています。車輪の両端に結び付けられている長い縄には、７～８歳の子供たちが、一番の晴れ着を着てつながって歩いていて、囃子の拍子に合わせて賑やかに市街を行ったり来たりしています。

明治25年の市街図（部分）です。
上の図と見比べてください。

みんな明るく、賑やかに作業を行っていた様子がよく分かります。人々にとって城の解体は、“破壊”ではなく“新たな街づくり”だったのです。